

NJ素流協 News

平成28年 5月10日 第136号

平成28年 5月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
 TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

表 NJ素流協平成27年度素材取扱量
(共同販売・システム販売)

区分	合板用 (m ³)	製材・集成材用等 (m ³)	計 (m ³)	バイオマス発電用 (t)
H27実績	152,753	90,847	243,600	54,162
計画量	185,000	85,000	270,000	105,500
計画比	83%	107%	90%	51%
H26実績	145,247	87,343	232,590	41,659
前年比	105%	104%	105%	130%

NJ素流協における平成27年度素材取扱量の合計は30万8160m³となり、初めて30万m³の大台に乗った。ご協力いただいた木材加工工場並びに組合員、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

▽共同販売・システム販売
 共同販売及びシステム販売における平成27年度の素材取扱量は、合板用針葉樹素材を主体として合

ノースジャパン素材流通協同組合 平成27年度素材取扱量30万m³を達成

計で24万3600m³となり、計画比90%、前年比105%の実績となった。またバイオマス発電用素材については5万4162トンで、計画比51%、前年比130%の実績となった(表)。バイオマス発電用素材を1トン=1.1m³として材積に換算すると、合計で29万7762m³の取扱量となった。

このうち合板用素材の計は15万2753m³で、計画比83%、前年比105%であった。樹種別内訳は、スギ8万6037m³(構成比56%)、カラマツ3万9842m³(同26%)、アカマツ2万6874m³(同18%)となっている。

製材・集成材用等素材の計は9万847m³で、計画比107%、前年比104%と順調に伸びることができた。樹種別内訳は、スギ7万542m³(構成比78%)、カラマツ1万6649m³(同18%)、ア

カマツ2200m³(同2%)、その他1456m³(同2%)であった。バイオマス発電用素材の販売量は前年比130%と大きく伸びているが、低質材供給先の分散等の影響により、計画比では51%にとどまった。

▽国有林素材委託販売

2年目を迎えた国有林素材の委託販売では、26年度の4倍近い1万398m³を取扱った。

▽素材取扱量及び組合員数の推移

次の図のとおり。

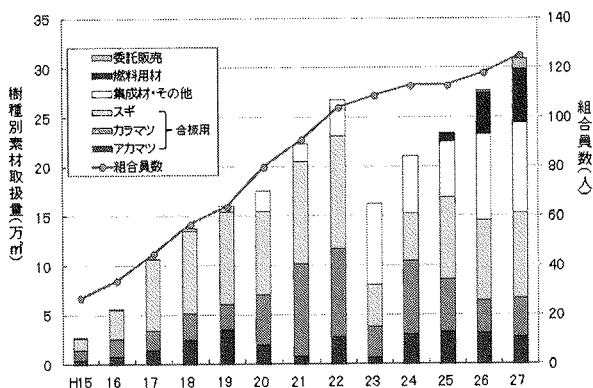


図 NJ素流協素材取扱量・組合員数の推移

トピックス

木質バイオマス発電関連施設が相次いで完成

NJ素流協が原木を供給している木質バイオマス発電関連施設の竣工式がこのほど相次いで舉行され、当組合役職員のほか出荷組合員が多数出席した。

▽花巻バイオチップ(株)

花巻市大畑の花巻第1工業団地において建設が進められてきた花巻バイオチップ(株)(森井敏夫社長)のチップ工場竣工式と祝賀会が4

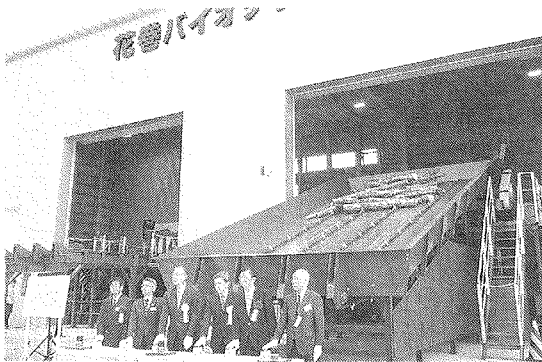


写真1 森井社長らがスタートボタンを押してチップ製造が開始された

月18日、現地及び市内会場で開催され、上田東一市長ほか関係者約100名が出席した。当組合では平成27年10月から同社に向けてチップ用原木を供給している。

同工場のこれまでの原木受け入れ総量は約1万9千トン。本年10月からは松くい虫被害木の受け入れも開始される予定。

隣接して建設が進められている(株)花巻バイオマスエナジー木質バイオマス発電所の発電規模は62

50kWで、発電に必要なチップ使用量約7・2万トンのうち約5万トンが花巻バイオチップで生産される。発電施設は本年11月の試運転、12月の売電開始を目指している。

▽(株)一戸フォレストパワー

一戸町岩館の一戸インター工業団地において建設が進められてきた(株)一戸フォレストパワー(小林直人社長)の木質バイオマス発電施設「御所野縄文発電所」の施設見学会と竣工報告会が4月27日、現地で開催され、稲葉暉町長ほか

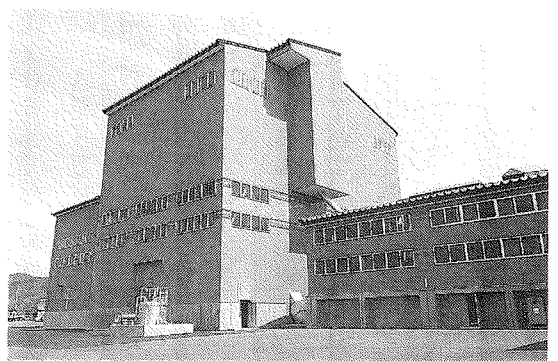


写真2 発電所外観(左から発電棟、ボイラー棟、チップ工場)

関係者約100名が出席した。当組合は、発電施設に隣接する(株)一戸森林資源(小林直人社長)のチップ工場に向け、平成26年10月からチップ用原木を供給している。

竣工報告会で小林社長は、「この発電所の発電能力は6250kWで、

一般家庭約1万5千世帯分の電力を賄うことが出来る。発電所の周辺地域は豊富な森林資源に恵まれており、素材生産業者、製材工場も多く、水資源にも恵まれている。今後この事業を長期的に続けていくためには、燃料となる木材の調達が必要不可欠であり、事業に関

わる皆様や地域の皆様に「発電所が出来て良かった」と思っていただけのように、職員一同邁進したい」と挨拶した。

チップ工場には切削チップを製造するドラム式チップパー、ディスク式チップパーの2台が導入されており、ドラム式チップパーでは伐根やパークも破碎できる。発電に必要なチップ使用量は約9万トンで、約8割に当たる7万トン強のチップを(株)一戸森林資源が生産する。

発電施設はボイラー棟と発電棟に分かれており、(株)タクマの流動層ボイラーでチップを燃焼し発生させた蒸気が発電棟に送られ、蒸気タービンを回し発電が行われる。

今後試運転を経て5月中旬から発電が開始され、5月末にはフル稼働となる予定。

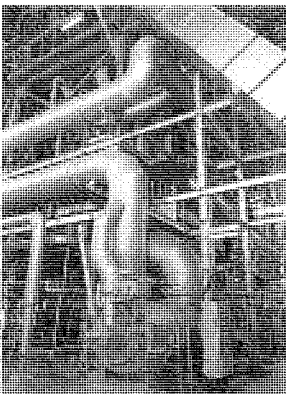


写真3 ボイラー棟内部

下刈り省力化試験を実施します

NJ素流協は、農林水産省の地域戦略プロジェクト「優良苗の安定供給と下刈り省力化による一貫作業システム体系の開発」(H28~30)に参画し、「下刈り回数低減技術の開発」に取り組む。具体的には、組合員の協力を得て主伐前・下刈り時の除草剤散布の実証試験を行うこととしている。

林業労働災害の発生続く

岩手労働局は4月15日、平成27年及び28年1~3月の県内での労働災害発生状況を公表した。

林業での平成27年の死傷者数は55人で前年より16人減少したものの、このうち死者数は3人で、

前年から3人増加している。また28年1~3月の死傷者数は11人で昨年同期の10人より1人多く、このうち死者数は1人で、3月に死亡事故が発生している。死亡災害の発生状況は次のとおり。

①杉の木をチェーンソーで伐倒した際、引掛かっていた松の枯れ枝が被災者の頭部に落下した。

②木材を集材車に積み込むためグラップルで木材をつかみ上げ旋回させたところ、検材中の被災者が木材を抱きかかえたまま空中を旋回し、オペレーターが気付き旋回を止めたところ、被災者が地面に落下した。

③間伐作業現場においてチェーンソーで伐倒作業をしていた被災者が、かかり木に他の立木を浴びせ倒したところさらにかかり木となり、後でかかり木となった木が被災者に倒れ下敷きになった。

④皆伐作業現場においてグラップルで原木をつかみ旋回させたところ、歩いていたら被災者の頭部に原木の末口が激突した。

各現場においてはかかり木の処理を適切に行うとともに、作業中の機械・原木に接触するおそれのある場所に作業者を立ち入らせることの無いよう、今一度徹底して下さい。

平成27年木材統計の概要

農林水産省は4月19日、平成27年木材統計を公表した。

1 素材需要量

平成27年の素材需要量(製材工場、合单板工場、木材チップ工場への素材の入荷量)は2509万2千³mで、住宅需要の伸び悩み等から、前年より49万3千³m(1.9%)減少した(図1)。

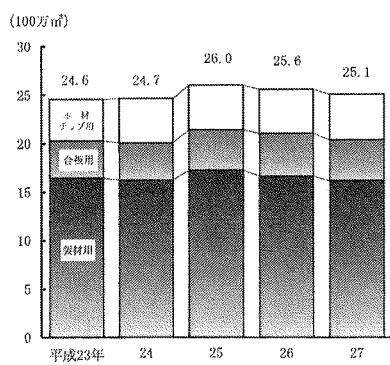


図1 素材需要量の推移 (農水省ホームページより)

2 素材供給量

前項で示した工場への素材供給量のうち国産材は2004万9千³mで、前年より13万3千³m(0.7%)増加した。一方、外材は504万5千³mで、前年より62万4千³m(11.0%)減少した。この

結果、素材供給量に占める国産材の割合は79.9%となり、前年より2.1ポイント上昇した(図2)。

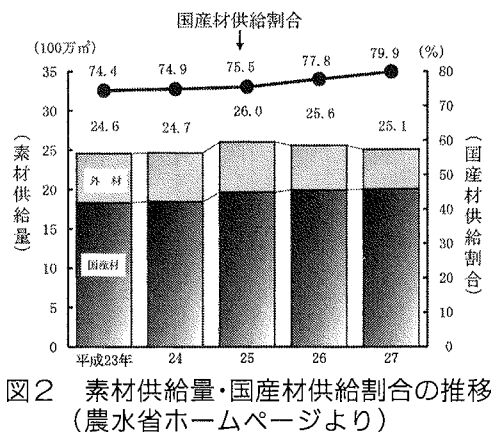


図2 素材供給量・国産材供給割合の推移 (農水省ホームページより)

3 製材品出荷量

製材品出荷量は923万1千³mで、前年より36万4千³m(3.8%)減少した。

4 普通合板・特殊合板生産量

普通合板生産量は275万6千³mで前年より5万7千³m(2.0%)減少、特殊合板は52万4千³mで前年より6万³m(10.3%)減少した。

5 木材チップ生産量

木材チップ生産量は574万5千トンで、前年より10万5千トン(1.8%)減少した。

今月の名木・巨木

33

(岩手県八幡平市)

上坊牧野の一本桜

所在…八幡平市松尾寄木

一本桜といえは小岩井農場のものが有名だが、岩手山を挟んでちょうど反対側に位置する八幡平市上坊牧野にも一本桜がある。

市営上坊牧野は県道2333号線を焼走り方面に南下し、サラダファームより少し南側の案内板から西側に入りしばらく直進したところに



ある広大な放牧地である。撮影した5月9日は気持ちの良い快晴となり、多くのカメラマンが岩手山をバックに咲き誇る一本桜をカメラに収めていた。

樹種はカスミザクラで、花の時期はオオヤマザクラより2週間ほど遅い。満開の桜の写真を撮るのにはなかなか難しいものだが、八幡平市観光協会のホームページでは市内の桜の開花状況をこまめに紹介しているのでありがたい。

森林総合研究所は4月27日、「花

咲かクマさん」と題して奥多摩地方で行われた共同研究の成果を公表した。調査地の哺乳類の糞から見つかったカスミザクラの種子のうち8割がツキノワグマにより食べられたもので、これらの種子に含まれる酵素を調べ親木のある位置の標高を求めたところ、ツキノワグマは親木より平均で約300m標高の高い方に種子を運んでいた。クマは春から夏にかけて、植物の若葉やサクラの果実を食べながら山麓から山頂方向に移動することによるものと考えられ、結果として温暖化の影響によるサクラの分布域の縮小を食い止めているという。今後は、同手法により森林の維持に果たす動物の役割の解明が進むものと期待されている。

「林業・木材製造業労働災害防止規程」変更のポイント④

▽チェーンソーを用いた伐倒作業での立入禁止区域の拡大(拡充)
チェーンソーにより立木を伐倒

する場合には、立木の樹高の2倍以上の距離の範囲内に他の作業者を立ち入らせてはならない(従来は1.5倍)。

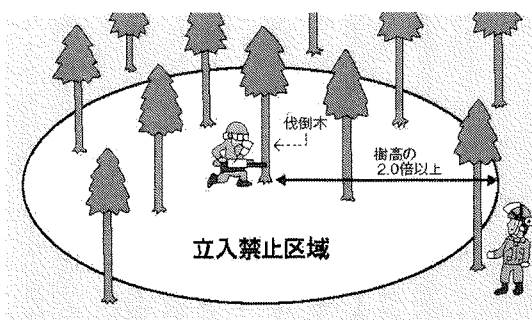


図 チェーンソーによる伐倒作業時の立入禁止区域(林業・木材製造業労働災害防止協会パンフレットより)

▽チェーンソーの取扱い作業に係る安全基準の充実(新設)

振動障害防止のために、国の指針の基準に適合したチェーンソーを選定しなければならない。

お知らせ

NJ素流協事務局の5月1日付

け人事異動をお知らせします。

・経営企画課長 吉田 佳右

(前職・経営企画課長補佐)

平成 28 年 4 月 分 の 販 売 実 績

樹種	合板用			その他 製材用等			計		
	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	7,180	105.1	94.3	3,671	59.0	74.3	10,850	83.1	86.4
カラマツ	2,675	94.6	81.3	1,427	64.9	76.3	4,103	81.6	79.5
アカマツ	3,138	228.2	109.0	235	85.8	3,238.6	3,373	204.6	116.9
その他針葉樹	0	0.0	*	0	*	0.0	0	0.0	0.0
広葉樹	0	*	*	0	*	0.0	0	*	0.0
合計	12,993	116.8	94.3	5,333	61.3	77.3	18,326	92.5	88.6

樹種	バイオマス用素材		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	1,686	95.9	162.8
カラマツ	1,226	170.4	167.5
アカマツ	3,117	151.4	450.3
合計	6,028	132.9	245.1

樹種	今年度累計			
	合板用 (m ³)	その他 製材用等 (m ³)	計 (m ³)	バイオマス (t)
スギ	7,180	3,671	10,850	1,686
カラマツ	2,675	1,427	4,103	1,226
アカマツ	3,138	235	3,373	3,117
その他針葉樹	0	0	0	0
広葉樹	0	0	0	0
合計	12,993	5,333	18,326	6,028
目標達成率 (%)	7.2	5.3	6.5	6.7
計 画 量	180,000	100,000	280,000	90,000

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【平成28年4月の需給動向】

- スギ原木は県外大型工場の受入制限が発生した影響で、岩手県内の動きも更に悪化した。
- カラマツ原木は依然不足状況の為、高値の価格を維持しており、今後も続くと予測する。
- アカマツ被害地域の伐採が制限される時期に入るため、出材は減少傾向になる (6月~)。

落穂拾い

N J 素流協の新しいパンフレットができました。表紙には『持続可能な森林経営の実現』と題され、サブタイトルとして「国産材の円滑な流通システム」と「森林資源サイクル」の構築を目指して”を掲げている。N J 素流協の関係者の一人として、「うーむ、なかなかの出来栄であるな」と自画自賛したのだが、ちよつと待ってくれ、体裁や文面などは少し工夫すれば格好などはいくらでも付けられるのである。問題は、記述されている美辞麗句？の中味が実現できるかどうかである。

パンフレットの中で、事業運営の5つの柱として、①国産材の安定供給、②流通対象の多様化、③人工林の森林資源サイクルの構築、④組合員の知識・技術の向上と後継者の育成、⑤企業の社会的責任 (CSR) の推進、を挙げている。N J 素流協は国産材の流通組織であることから、上記の①、②を追求するのは当然のことである。また、③については、持続可能な森林経営を実現するためにはその基盤となる人工林資源を間断なく永続させていく循環システムを作ることが不可欠であることもわかる。そして、これらの事業活動を全面的に担うのが林業従事者やその後継者、すなわち、人材である。そのためにはまさに、④が不可欠なのである。林業生産活動に必要な知識・技術を具備した林業従事者を継続的に確保しつつ、その後に続く後継者の育成を不断に行なっていくかなければならないのである。このように見てくると、①~④について

では、これまでもわが国の森林・林業における課題や問題点として取り上げられて来たし、その解決に努力してきた経緯があるが、未だに満足のいくような成果に到達していない課題が沢山あるのも事実である。しかし、現在に至るまでの長い間に蓄積された経験・知識・技術の上に立脚して、新たな発想に基づき視点を変えて課題に取り組むならば、その先に光が見えて来るであろう。

さて、⑤の「企業の社会的責任 (CSR) の推進」である。近年、CSRに関する記事や発言が横溢しているが、それだけ企業が社会的責任を果たすことに対する期待が大きくなっていることの左証ともいえる。だが一方、この1、2年をみても、ファストフード某社の異物混入の発覚、免震ゴムの試験数値改ざん、2020年東京オリンピックのエンブレムの疑似問題によるその作品の使用中止、マンション建設における杭打ち工事データの改ざん等、企業の社会的責任の逆をいくような事件が頻出してきている。

N J 素流協は企業であるから、その事業活動の過程や結果において周囲や地域社会に対して良かれ悪しかれ影響を及ぼすことになる。その影響が継続的に良い効果をもたらすならば、周囲の人々や地域社会と良好な関係を維持することが期待できるが、反対に悪影響をもたらすことになれば、N J 素流協は受け入れられないであろう。

したがって、今後、N J 素流協は、企業の社会的責任の観点からこれまでの事業活動を検証するとともに、企業としての社会的責任を含めた総合的な事業計画の立案に真摯に取り組む必要がある。